

.....

.....

.....

1

10. ヒヤリハット体験当事者の属性（回答者は当事者A）

○当事者A	年齢[59]歳、勤続年数[39]年、現場経験年数[38]年、階級[消防士長]、同様の活動 [頻繁]、任務 [隊員]
○当事者B	年齢[]歳、勤続年数[]年、現場経験年数[]年、階級[]、同様の活動 []、任務 []
○当事者C	年齢[]歳、勤続年数[]年、現場経験年数[]年、階級[]、同様の活動 []、任務 []
その他 (当事者が4人以上の場合)	

11. 事例発生経過。

	誰(何)が	なにをした	その他・備考など
経過1	Cが	火災現場において飛来した火の粉が首筋に入り火傷した。	
経過2			
経過3			
経過4			
経過5			
経過6			
経過7			
経過8			
経過9			
経過10			

【その事例発生時の状況について】

.....

○事故の場合 : 事故が起きたのはどうしてだと思うか？

ヒヤリハットの場合 : ヒヤリハットで済んだのはどうしてだと思うか？

その他 : 完全着装ができていなかった

○心理・体調について

a. あせりを感じていた

・早く、現場到着や、活動をしなければならないという“あせり”を感じていた。	いいえ
・被害拡大が消防活動を上回っており“あせり”を感じていた。	いいえ
・周辺の野次馬などにより“あせり”を感じていた。	いいえ

b. 注意力が欠如していた

・1つの事象に集中し、他の事象への注意力を欠いた。	はい
・活動終息（鎮火等）や活動内容が些細だったため注意力を欠いた。	いいえ
・体調不良や疲れにより注意力を欠いた。	いいえ

c. 経験・知識が不足していた。

・活動内容が、自己の能力や技量を超えていた。	いいえ
・活動中に起こりうる危険について認知していなかった。	いいえ
・活動に対する経験が不足していた。	いいえ

d. 心身の不調があった

・体調が悪かった。	いいえ
・悩み事があった。	いいえ

○装備・資機材について

e. 資機材の故障・不具合があった。

・装備・資機材自体に問題があった。	いいえ
・装備・資機材の使用方法が誤っていた。	はい
・装備・資機材の対処能力を超えていた。	いいえ
・必要とする装備・資機材がなかった。	いいえ

○活動環境について

f. 障害物や自然環境（雨・濃煙）によって視界がさえぎられた。

・障害物（建物等）のため周囲の状況が見えなかった。	いいえ
・特異環境（煙、暗闇、降雨等）のため周囲の状況が見えなかった。	いいえ

g. 行動しにくい環境だった。

・狭隘な場所であった。	いいえ
・暑かった（寒かった）。	いいえ
・野次馬が多かった。	はい
・現場周辺の地理に不案内だった。	いいえ

h. 足場が悪かった。

・足元が躓いたり滑りやすかった。	いいえ
・足元の強度が不足していた。	いいえ

○指揮・管理について

i. 適切な指示が得られなかった（適切な指示を与えられなかった）。

・活動指示が得られなかった。（無線が通じない等。）	いいえ
・指示内容に誤り・偏りがあった。	いいえ
・指示内容が実施困難であった。（周辺環境に、隊員技量の把握に欠けた。）	いいえ

k. 関係者間の情報伝達・役割分担が不十分だった。

・隊員の連携が不十分だった。	いいえ
・隊員が不足していた。	いいえ

○その他

l. その他の理由があった。

いいえ

【事故発生後の取り組みについて】

.....

○注意力欠如、焦り等の対策について

安全衛生管理委員会で公務災害発生事例として、問題点と安全対策について検討を行った。
この事例の教訓として、防火衣襟部分の完全着装及びヘルメットのしころの跳ね返りに注意する。

○装備・資機材の対策について

空気呼吸器着装後は、再度防火衣の完全着装ができているか確認する。

○活動環境の対策について

体に異常を感じたら、すぐに上司へ報告する。

○指揮・情報伝達の対策について

公務災害発生事例

〇〇消防署

発生日時	平成20年 8月 8日（金） 2時06分頃
発生場所	〇〇市〇〇町89番地 （月極駐車場）
被災職員	C 消防士長
事故事例	本件は、平成20年8月8日（金）01時40分覚知の共同住宅火災に、北2号車の放水員として出動し、飛来してきた火の粉により背部を火傷した事故である。 本部第2出動指令により出動、出火建物南東約100mの公道上の車両部署。 被災職員は、放水長と協力しホースカーによりホース1線6本を延長し火点南側の駐車場内に到着。同駐車場内において分岐管から40ミリホースを延長するためホースと分岐管の結合作業をしていた。 このとき、前かがみの姿勢で作業をしていたところ、防火衣とヘルメットのしころの間の首筋部分にできた隙間に、飛来してきた火の粉が入ったものである。 その瞬間「熱い」と感じ、傍にいた隊員に首筋から背中にかけて叩いてもらい火を消し、その後若干痛みを感じながら、火勢鎮圧まで消火活動を継続した。 帰署後、中隊長が背中を観察したところ、背中上部に火傷の水泡が潰れた跡を確認したため、医療機関に救急搬送したものの。
負傷程度	背部Ⅱ度火傷 （0.5%）7日間の通院治療を要す。
問題点	・ 災害現場における、防火衣の完全着装とその確認。 ・ 迅速な現場での負傷報告の履行。
安全対策	・ 防火衣襟部分の完全着装及びヘルメットのしころの跳ね返りに注意する。 ・ 呼吸器を着装後は再度防火衣、ヘルメットの着装確認をする。 ・ 体に異状を感じたらすぐに上司へ報告する。